

JAPAN-ITALY Travel On-line

イタリアへ行こう!イタリアを見よう! ✈

イタリア旅行情報サイトJAPAN-ITALY Travel On-line イタリア美しい風景～熟年の旅～

15 novembre 2007

Il Bel Paesaggio dell'Italia

この素晴らしき美のかたち(4)
イタリア北部編



近藤 節夫

●コルティーナ・ダンペッツォの香しき自然

コルティーナ・ダンペッツォは、オーストリア領に近い南チロル地方の風光明媚なリゾート地である。この地が日本人に一躍知られるようになったのは、1956年開催の冬季オリンピック大会で、猪谷千春選手がアルペン回転競技で銀メダルを獲得してからである。だが、夏の魅力も決して冬に優るとも劣るものではない。

いま世界の観光地は年々交通網が整備され、シーズンになるといずこも大勢の観光客が押し寄せ、自然環境は破壊され環境汚染が深刻になっている。その中でまださほど俗化されることもなく、天然の美がほどよく維持されているのが、このコルティーナ・ダンペッツォ周辺である。近郊都市から公共輸送のアクセスもやや遠くてあまり便利ともいえない。交通の利便があまりよくないことが、皮肉にもこの自然環境を守ってくれている。



イタリア好きの日本人にとっても、滞在1週間のスケジュールでここに2泊をアテンドするのは旅程上苦しいが、すでにローマ、ナポリ、フィレンツェ、ミラノ、ヴェネツィア等の名所旧跡を訪れた自然派リピーターにとっては、いま残された、とっておきのディスティネーションである。考えてみると観光の本質とは、非日常の素晴らしい自然の中にどっぷり浸り、心を癒しリフレッシュすることではないだろうか。その観点から言えば、古代遺跡巡りも結構であるが、コルティーナの自然探訪の魅力は思いのほか捨て

がたい。異様な山塊のドロミテ山群に包まれた、この夏のリゾート地には溢れんばかりの自然がいっぱいなのである。

お薦めコースはヴェネツィアから上がり、ヴェローナへ下りてくるルートである。溪流に沿って遡上し、牧場を走り、峠を越えて牧歌的なイタリアの田園を走り抜け、じわじわとゴールへ近づいて行く。たどり着いたところが、海拔1,240mのパラダイス、コルティーナ・ダンペッツォである。

こんな小さな山里だが、2つの山頂へ向けて大ロープウェイが運行されている。そのひとつは、何と日本第二の高峰南ア・北岳(3,192m)よりも高い標高3,244mまで連れて行ってくれるのだ。その頂上から360度展開される大パノラマの素晴らしさはいまさら説明するまでもない。

この展望台に昇ったらミズリーナ湖まで足を伸ばし、湖畔の芝生を裸足になって走り回るとその感触が気持ちいい。目の前の山の木々の間から吹き降ろす爽やかな風が頬をなでる。コルティーナの豊かな自然が、圧倒的な臨場感をもって周囲の風物を心に焼きつけてくれることだろう。

月5回発行、
JITRAメルマガ
登録はここから！
メールアドレス入力

登録

メルマガ案内

コルティーナからボルツァーノを経てヴェローナへ下る「ドロミテ・アルプス観光ルート」は、山岳道路としても国際的な評価が高い。周囲の景色は変化に富み、いくつもの谷間やトンネル、峠、湖水を通りながらドロミテ山塊を走り抜ける。

まさに生命の洗濯ができるコルティーナ・ダンペッツォのヴァケーションである。

●ベルニナ鉄道車窓から楽しむ大パノラマ

正式には、レーティッシュ鉄道ベルニナ線といわれ、スイスの国際鉄道である。その圧倒的なパノラミックビューは勇壮にして、かつ繊細である。イタリアの北部都市ティラーノとスイスの保養地サンモリッツを結ぶアルペンルートをおとぎ電車のような真っ赤な車体が、あたかもアルプス山岳地帯を箱庭にした模型電車のようにして走っている。



サンモリッツから下ってイタリアへ入る'ボンジョルノ！イタリア'コースを選ぶか、ティラーノからイタリアを発つ'アリベデルチ！イタリア'コースを採るか。甲乙つけがたいが、上りと下りの両コースを乗車した印象から言えば、後者のティラーノから上ってイタリアへ別れを告げるコースをお薦めしたい。

ティラーノ市街を市電が縫うように走り抜け、やがて少しずつ勾配を上げていく。80/1000勾配の急峻な登りが約4kmにわたって続いている。標高460mのティラーノから右に左に目と身体を忙しくひねっている間に、アルプス分水嶺のひとつ、オスピッツ・ベルニナ（標高2253m）まで標高差は1,800mにも達する。駅の傍らのビアンコ湖から流れ出る雪解け水は、遠く黒海と地中海へ流れ込むというから壮大である。



ベルニナ線最大の呼び物、オープンループが近づいてくるとナイスショットを狙う乗客の動きがにわかに激しくなる。電車は左へ大きくカーブを切りながら舐めるように一周して高度を稼いで行く。内回りとなる左側に身を寄せる乗客の間から、歓喜のどよめきとため息が漏れる。

白銀に輝く絶景を、目の前に望むアルプ・グリュム駅で入れ替え作業のため停車した時、駅舎へ立ち寄ってみると日本語で書かれた記念木版が貼り付けてある。サンモリツ

ツ駅にも同じものはあるが、79年6月にベルニナ鉄道と箱根登山鉄道が姉妹鉄道締結を交わした記念プレート(84年と記されているが)である。その当時、箱根とサンモリツのふたつの記念式典をお手伝いしたいきさつもあり、私にとってはことのほか懐かしい。

この沿線風景のダイナミックさと優雅さは、アイガーやマッターホルンの登山鉄道のアクセスに比べても決してひけをとるものではない。車窓から眺める紺碧の空、雄大な山群、エメラルドグリーン湖水等々、それより何より赤いおとぎ電車にマッチした風景構図は、乗客の心を捉えて放さない。全体的な心象風景は終着駅サンモリッツへ足を踏み下ろした時、気持ちは満ち足りてはちきれんばかりである。

イタリアをこよなく愛する人たちには、イタリアへ(から)のゲートウェイに、ぜひ一度はこのベルニナ鉄道を利用して欲しいと思う。

写真トップ:美しい風景を背景に走るベルニナ鉄道※
本文中上から順に: 壮大なドロミテの山々をバックに
白銀の絶景を彩る赤い車体※
人気ポイント、ブルジョアのオープンループ※

(※ベルニナ鉄道の写真: Copyright by Rhaetische Bahn, Chur)

著者プロフィール

近藤 節夫(こんどう せつお)

昭和13年東京都中野区生まれ。(社)日本ペンクラブ会員。エッセイスト・旅行ジャーナリストとして、精力的に著述活動を続けている。学生時代の「60年安保闘争」体験と、若いころの海外ひとり旅による危機一髪のリスク体験から、広く「臨場感」の大切さを啓蒙している。日ごろより知識の蓄積のうえに、現場の第一線で汗を流さなければ本物ではないと、持論である現場体験の重要さを主張している。40年間旅行業界にかかわり、この間被発給旅券12冊、海外渡航歴約200回、渡航先国71カ国で、旅行業界で長らく国家試験講師、研修試験委員を務め、旅行業界誌等に度々寄稿し、シンポジウムでも持論を提言して「旅行業界の彦左衛門」とも称された海外旅行のプロである。著書に「現代 海外武者修行のすすめ」(新風舎刊)がある。

HPは <http://www.mr-kondoh.com>

もっとイタリアを知る イタリア美しい風景 ～熟年の旅～

| もっとイタリアを知る アルキーヴィオへ | このページのTOPへ | HOME PAGEへ |

<http://www.japanitalytravel.com>

© JAPANITALY.COM srl - MILANO 2000 All rights reserved.